

中国国家図書館蔵

『大慧普覚禅師年譜』 についての覚え書き

中 西 久 味

『大慧普覚禅師年譜』（以下『年譜』）は、宋代を代表する臨済宗の禅僧大慧宗杲（一〇八九—一二六三）の伝記についての基礎資料となるものである。さらには、大慧という一禅僧の伝記というばかりでなく、当時の禅宗ひいては仏教界の動向ともかかわっている。あわせて、彼の禅の影響は仏教界のみにとどまらず、当代の名士貴顕に汎くおよんでいたために、当時の儒仏の交渉を具体的に伝える資料ともなっている。この書は、はじめ祖詠という禅者が編纂し、蓮社居士と号していた張掄が淳熙十年（一一八三）四月に撰述した「大慧禅師年譜序」を附して印行されたものである。張掄は、能文の士とされ、孝宗朝の幸臣とも目されていた人物である。^①ただし大慧の門人であったはずの祖詠については不明であり、しかも、この書の刊行にあたっては、大慧に近侍していた先輩僧たちに諮ることをしなかつたらしい。ために、大慧の法嗣の雲臥庵主晁瑩は、おなじく法嗣の遯庵宗演あての書簡^②なかで、その誤謬をきびしく指弾したのであった。書簡を受けとった宗演は、開禧元年（一二〇五）になってこの書を重訂し、晁瑩の指摘を容れて六十余もの箇所を改訂して刊行したという。^③

現在、この『年譜』は縮刻蔵（騰秩第八冊）に収められ、これは明蔵に拠っている。^④明蔵以前の古本としては、

わが国に伝わる二本の存在が知られている。^⑤ その一は、立正大学大崎図書館所蔵の覆宋五山版一卷一冊である。その二は、内閣文庫所蔵の室町後期ないし江戸初期のものとしてされる写本一冊であり、この写本は林羅山の旧蔵にかかっていた。このうち立正大学五山版は、その影印版が柳田聖山・椎名英雄共編『禅学典籍叢刊 第四卷』（臨川書店、二〇〇〇年）に収録されている。また内閣文庫写本のほうも公開されている。両者を対比してみると、本文の行款は同一であり、ともに「宝祐癸丑天台比丘德潜／募縁重刊于径山明月堂」という南宋宝祐元年（一二五三）重刊の刊記がある。ただ両者の構成にはいささか相違が見うけられる。さらに、この二本とは別に、中国国家図書館にも同じく宝祐元年刊行の南宋版『年譜』が所蔵されていることも知られていた。ところが、この中国国家図書館の南宋版『年譜』については、公開されていないこともあって、これまでさほど検討されていないようである。残念ながら原本について直接調査できないため、隔靴搔痒の感は否めないが、中国国家図書館蔵の『年譜』に関連する資料についていささか検討しておくことにする。

一

中国国家図書館の南宋版は、『北京図書館古籍善本書目』史部（第四五六頁）^⑥に、

大慧普覚禅師年譜一卷

宋釈祖詠撰 宋宝祐元年径山明月堂刻本 一冊
十一行二十字白口左右双辺

と録される一本である。この書はもと常熟瞿氏の鉄琴銅劍楼の所蔵にかかり、瞿鏞撰『鉄琴銅劍楼蔵宋元本書目』子部（一八九七年）^⑦にも、

大慧普覚禪師年譜一巻

宋刊本 每半葉十一行、行二十字。宗演跋未有墨図記、云、宝祐癸丑天台比丘德潯募縁重刊於経「徑」山明月堂

と録されている。また、『鉄琴銅劍樓書影』宋本書影・子部六〇（一九二二年）には、その本文第一葉が影印され、あわせて丁祖蔭による識語（同書『識語』卷三）が附けられている。^⑧

近年にはより詳しい情報が得られるようになり、『中国国家図書館古籍珍品図録』第六六頁（北京図書館出版社、一九九九年）には、巻首に置かれた張掄序文の最後二行と本文第一葉の写真が載せられ、書誌情報も記されている。また、南宋版の原本は実見できないが、その鈔本のマイクロフィルムが公開されている。鈔本は版心に海虞瞿氏鉄琴銅劍樓影鈔本と記し、玄・弘・寧・淳・丘などの字を避諱し、鉄琴銅劍樓による清代の鈔本である。この鈔本の作成については迫られた事情があったとされ、影鈔本とされるものの決して良本とは言えない。けれども、この鈔本によって、本文がわが国に伝存するささきの二種の古本と全同であることが確認され、またこの書全体の構成についても知ることができる。

以上によって中国国家図書館南宋版（南宋重刊本）の現在のところでは知りうる書誌的な情報をまとめてみると、おおよそ以下のようなになる（*は鈔本のマイクロフィルムによる）。

巻冊 一巻一冊

序文 *張掄「大慧禪師年譜序」半葉六行、毎行十一字

本文

匡郭 左右双辺、有界、郭内（タテ20・4センチ×ヨコ15・8センチ）

行款 半葉十一行、毎行二〇字、*注文双行

紙数 本文六五丁

版心 白口、上黒魚尾

刻記 * (本文第六五丁ウラ) 浚儀趙氏時浄同男姚可遠 / 謹施官会壹阡貫用刊此録一卷結 / 般若縁所祈

身宮康泰寿筭延長 / 南平軍比丘慧昌發心敬書

跋 住華巖比丘宗演跋

刊記 宝祐癸丑天台比丘德濬 / 募縁重刊於径山明月堂

所蔵印 「閩源真賞」、「鉄琴銅劍楼」、「峨嵋山人収蔵図書之記」、「顧印明美」等

これを、さきの立正大学五山版の影印に附けられている椎名宏雄氏による解題の書誌情報(前掲書四六五頁)と対比してみると、五山版では匡郭内がタテ19・7センチ×ヨコ14・7センチとやや小さいようであるが、本文第六五丁ウラの刻記が削除されているほかは全同である。この刻記の四行は内閣文庫写本にのみ見えており、鈔本の刻記と完全に一致する。鈔本では最後に「書」一字を欠くが、それを補うこともできる。こうして五山版ならびに内閣文庫写本は、推測されていたように、ともに南宋重刊本の模刻ないしその謄写であることが確認できる。

ところが、南宋重刊本の鈔本では本文に続く宗演の跋と刊記の後に、書体を異にしてさらに三篇の文章が附けられており、五山版や内閣文庫写本『年譜』とは異なっている。三篇の文章のうち啓一篇のみは、五山版では張掄序文の前に添えられているが、内閣文庫写本にはこの啓も欠けている。このことについて、あらためて次に取りあげたい。

三

さて、この三篇の文章は南宋重刊本『年譜』原本に確かに含まれているのであって、瞿鏞撰・瞿啓甲修訂『鉄琴銅劍樓藏書目錄』巻十八（一八九八年）^⑩には次のように記録されている。当該箇所に傍点を附しておく。

大慧普覚禪師年譜一卷 宋刊本

宋釈祖詠編。前有淳熙癸卯張掄序、後有比丘宗演、及程公許跋。又附呂成公啓一首、摹手蹟以刻者。又淳祐十二年劉震孫書後。宗演跋末有墨圖記、云、「宝祐癸丑天台比丘德潛募緣重刊於徑山明月堂」。

すなわち、この書の巻末には、程公許の跋・呂成公の啓一首・劉震孫の書後の三篇が附けられていると明記されている。このうち注意されるのは呂成公の啓である。呂成公とは呂祖謙（一一三七—一一八二）、号は東萊のことで。成は呂祖謙の諡である。彼の書啓がその筆蹟に倣って印刻されていると記されている。五山版の張掄序文の前に添えられている啓は、従来誤解されているが、この呂祖謙の書啓にほかならない。五山版ではおそらくこの書啓が最も重要であると見なして、この一篇のみを取り出して冒頭に置いたのであろう。

ところで、この三篇の文章は、わが内閣文庫に所蔵されている写本の二冊本『大慧普覚禪師語録』（以下『大慧普覚禪師語録』については『語録』と略称）の末尾にも附けられているのである。しかも、中国国家図書館南宋重刊本『年譜』にも含まれていない楊棟の書後一篇がさらに付け加えられている。この内閣文庫写本『語録』は同『年譜』とともに林羅山の旧蔵にかかるものであり、『年譜』と同様に室町ないし江戸初期の抄写とされている。行款は十一行二〇字であり、これも『年譜』と同一である。この写本は序跋と本文では筆が異なり、かつ

本文には乱丁もあるが、必要なかぎりで簡条書きにしてみると次のような構成になっている。

(I) 張浚撰「大慧普覺禪師語録序」 紹興乙丑(一一四五) 四月八日

*上冊・本文 住徑山能仁禪院語録(道謙録・黃文昌重編)・阿育王山広利禪寺語録(惠然録)・再住徑

山能仁禪院語録(道先録)

*上冊・附録 少師保信軍節度使充體泉觀使魏国公張浚撰「大慧普覺禪師塔銘」

(II) 尤焞撰序文(「大慧普覺禪師語録序」) 淳祐壬子(一一五二) 仲冬

*下冊・本文 住江西雲門庵語録(悟本録・黃文昌重編)・福州洋嶼雲門庵語録・泉州小谿雲門庵語録・

雲居首座寮秉拂・室中機縁・頌古・偈頌・讚仏祖・自讚・下火・遺偈

*下冊・附録 「張丞相(張浚)跋」 隆興甲申(一一六四) 季夏

(III) 程公許跋

(IV) 呂祖謙啓

(V) 劉震孫書後 淳祐十二年(一一五二) 立秋

(VI) 楊棟書後 宝祐元年(一一五三) 四月壬子(五日)

二冊本『語録』というのは、三十巻本の『語録』が乾道七、八年(一一一七、一一一八)に入蔵されていたが、そのうちの第一巻から第六巻を上巻、第七巻から第十二巻までを下巻としたものであったらしい。実際に、明蔵を底本とし開元寺版の宋蔵によって校勘したと指摘されている大正蔵四七巻所収の『語録』¹¹⁾について見ると、この二冊本の本文は確かに大正蔵本の第一巻から第十二巻までに完全に一致する。それとは別に、上巻巻首に張

浚の序文、下巻巻首に尤焞の序文が添えられ、下巻巻末に四篇の文章が附けられている。このうち、(Ⅰ)(Ⅱ)の二序を除いて、(Ⅲ)から(Ⅴ)までが、現存の南宋重刊本『年譜』にも附けられているはずの文章である。また(Ⅵ)の楊棟書後は、この写本の二冊本『語録』にかぎって附けられているものである。

二冊本『語録』の古版についても、他に元の泰定二年(一三二五)刊本が西尾市岩瀬文庫に所蔵されている。その元版では写本と同様に上下冊それぞれの巻首に張浚と尤焞の二序が置かれているが、本文とは筆が異なり補写されたものである。また覆宋五山版の上冊のみが成篋堂文庫に所蔵され、巻首にはもとの宋版の形式をとどめる張浚の序文が置かれているという。^⑧したがって、張浚と尤焞の序文については二冊本『語録』にもともと附けられていた可能性がある。ただし、書末の四篇の文章は元版には見えていず、五山版については不明である。現在知られるかぎり、内閣文庫写本のみにも附けられているものである。^⑨この四篇が何故附けられたのか、その理由については不明とせねばならない。内閣文庫写本のばあい、おそらく『年譜』と二冊本『語録』が同時に抄写され、そのさい、『年譜』の末尾に附けられていたはずの四篇が、内容からみて『語録』のほうに附くのが適当であると見なされて移されたのでもあろうか。

さらに、これと関連して宝祐元年南宋重刊本の構成内容が問題となってくる。二冊本『語録』に附けられている(Ⅱ)の尤焞による『語録』序文には、文中に「徑山の徳濟上人、再び刻版し、以て其の伝を広めんと欲す」と言い、この序は重刊のさいに著されている。したがって、宝祐元年重刊本には『年譜』とともに『語録』も含まれていたことは明らかである。

また、二冊本『語録』の古本には、尤焞序文とあわせて、(Ⅰ)の張浚による序文も附けられている。この序は紹興十五年に撰述されている。文中に「門人道謙、(大慧の)語録を持して至る。予れ偏観詳閲するに、江河を決するが若し云云」と言うことから、道謙が大慧の記録を張浚に呈示して、彼に序を乞うたものかと推測さ

れる。張浚は秦檜と対立したことから、この時には長沙に寓居していたが、大慧もまた同様に紹興十一年より衡州に配流になっていた。道謙が両者の使者となっていたのではなかったか。この時の大慧の語録は、時期的にも径山寺における最初の住持までのものでなければならぬ。おそらく道謙自身が筆録したものであったと推測される。二冊本『語録』の本文冒頭に置かれる道謙録・黄文昌重編の「住径山能仁禅院語録」が、それに相当するのではなからうか。張浚の序文は、がんらいこの道謙筆録部分にかぎって附けられていたと思われる。ただし、二冊本『語録』では、もとの道謙の筆録そのままではなく、すでに黄文昌による重編を経たものを収めていることになる。

いったい、宋蔵に入蔵された三十卷本『語録』とは別に、単行本としては、まずこの張浚の序文が附けられた道謙の筆録部分のみが刊行されていたらしい。それは、陳振孫『直齋書録解題』卷十二に、

大慧語録四卷 僧宗杲語 其徒道謙所録 張魏公序之

とあることによっても推測される。これは歴代の書目中では大慧の『語録』についての最も早い記録である。張魏公とは張浚。四巻というのも、大正蔵所収『語録』の「住径山能仁禅院語録」が四巻となっているのと一致する。陳振孫については、淳祐九年（二二四九）に致仕し、ほどなく卒したと指摘されているから、これは宝祐元年に重刊される直前までの状況を伝えていると考えられる。したがって、全く臆測するしかないが、『語録』が重刊されたさい、すでに刊行されていた『語録』に附けられていた張浚序文があわせて再録されたとしても不都合はない。

では、重刊されたさい、そこに収められていた『語録』は、この張浚と尤焞の二序が附けられていたらしい二冊本であったのかといえ、そうとも断定できない。『鉄琴銅劍楼蔵書目録』卷十八の『年譜』の下には、さ

きの引用に続いて、

案、師（大慧）著与『年譜』同刻者、有『宗門武庫』一卷、『遺録』一卷、『語録』三十卷。見徐立齋相国『含経堂書目』。

と記されている。これによれば重刊されたのは三十卷本『語録』であつたらしい。このほか『宗門武庫』『遺録』も同刻されたいが、後者の『遺録』については不明である。また、これらの著述が同刻されていたことは、徐立齋の『含経堂書目』によつて知られるという。徐立齋は、康熙年間の内閣大学士であつた徐元文、号は立齋（一六三四—一六九二）^⑧のこと。残念ながら現在では当該の書目の内容を確認することができない。ちなみに王国維の『兩浙古刊本考』卷上・杭州府刊板（一九三二年）にも、

大慧普覚禪師年譜一卷 宗門武庫一卷 語録三十卷 遺録一卷 宝祐元年

宝祐癸丑 天台比丘德澹募縁重刊於径山明月堂

と出ている。これは『鉄琴銅劍樓藏書目録』にそのまま従つたのであろう。

そこで、以上から推測される宝祐元年に重刊された大慧関係の著述は、ひとまず次のようになる。『年譜』末尾に附録された四篇の文章のうち、程公許の跋文は、『語録』の尤焞序文にあい応じたかたちで著されている。また他の三篇も『年譜』にのみ関わる内容ではなく、重刊された著述全体に附けられていたと考えられる。したがつて、『年譜』その他の著述は『語録』に附属されたもので、かつ『年譜』が最後に置かれていたのではなかつたかと推測される。

① 『大慧普覺禪師語録』

? (I) 張浚撰「大慧普覺禪師語録序」 紹興乙丑(一一四五) 四月八日

(II) 尤焞撰「大慧普覺禪師語録序」 淳祐壬子(一二五二) 仲冬

* 語録本文 三十卷

② 『宗門武庫』 一卷

③ 『遺録』 一卷

④ 『大慧普覺禪師年譜』

* 張掄撰「大慧禪師年譜序」 淳熙癸卯(一一八三) 四月望日

* 年譜本文

* 比丘宗演跋(開禧乙丑一二〇五以後)

* 宝祐癸丑(一二五三) 重刊記

(III) 程公許跋

(IV) 呂祖謙啓

(V) 劉震孫書後 淳祐十二年(一二五二) 立秋

(VI) 楊棟書後 宝祐癸丑(一二五三) 四月壬子(五日)

なお、刊記には天台比丘德濬が径山明月堂で重刊したとある。径山明月堂はもと大慧の住庵の名であり、現在も径山寺境内にその位置を確認できる。また德濬という僧については不明であるが、『無準師範禪師語録』巻五には「德濬^②請」による無準の自讃が収められている。それから推測すると、彼は無準の門人であった可能性

がある。宝祐元年より数年前の淳祐九年まで径山寺の住持であったのが無準師範（一一七八―一二四九）にほかならない。彼の門下には錚錚たる禪匠を輩出したわけであり、そのなかにはわが円覺寺開山の無学祖元（一二三六―一二八六）、建長寺第二世の兀庵普寧（？―一二七六）が含まれる。また聖一国師円爾（一二〇二―一二八〇）をはじめとする日本の留学僧もその門下にあつた。徳濟がこれらの禪師たちに近かつたとすれば、彼によつて重刊された『年譜』等の大慧に関する著述は、早い時期に日本に将来され、五山で伝承された可能性も考えられる。

四

これまで見てきた宝祐元年重刊本のうち、本文とは別に附けられていたと推測される（I）から（VI）の序跋等は、当時の思想状況を窺わせる資料でもあり、また一般には目に触れることの少ない文章である。以下に移録し、いささか附記しておくことにする。

（I）張浚撰「大慧普覺禪師語錄序」紹興十五年（一一四五）

如來正法眼藏、大迦葉一笑、而得其傳。回視五千四

十八卷之書、如彼黃葉、聊（而）止兒啼。了無一語、佛實有

說。上智明徹、於此證悟、護持涵養、與道爲一。息熱裂

網、摧邪淨濁。光明所燭、濟物無盡。嘗觀堯舜之世、君

臣相與垂衣正裳、于一堂之上都兪、可否目擊而決。／

意其君臣之間、所自得者深、毫髮弘（私）念不起胸中。故／
淵默躬行、四海說眼（服）。祖師直指人心、見性成佛、其亦／
發明斯道也歟。／

佛日杲公、得法於圓悟禪師、臨濟宗風、賴以不墜。門／

人道謙持語錄至。予徧觀詳閱、若決江河。其機鋒峻／

拔、又將超出圓悟蹊徑。嗚呼休哉。傳之萬世、無疑也。／

公與士大夫交游厚善。倘見乎此、而深達窮通死生／

之分、可以爲吾道之助。紹興乙丑四月八日紫巖居／

士張浚序／

①「説」字は五山版に「悦」字に作る。②「倘」字は五山版に「儻」字に作る。

上述のように、この序文は重刊された『語録』に附けられていたか明らかではない。ただ、二冊本『語録』の伝存する岩瀬文庫元版・内閣文庫江戸初期写本には、重刊のさい著された尤煇序文とあわせて附けられている。ただし、ともに補写による。また成實堂文庫五山版に附けられたこの序文は最も完全であるとされている。五山版は現在見ることができないが、石井修道氏「大慧語録の基礎的研究（上）」に移録されている。ここでは内閣文庫写本を移録し、石井氏の録文によって括弧内に誤写を訂正しておく。二冊本『語録』の古本はわが国にのみ伝存するらしく、したがって張浚序文も同様である。張浚（二〇九七—一一六四）の字は徳遠、紫巖と号し、魏国公に封ぜられる。張栻の父。朱熹に「少師保信軍節度使魏国公致仕贈太保張公行狀」があり、『宋史』卷三六一に立伝される。また『宋元学案』卷四四。大慧みずから方外の道友としての張浚を語ったものと

して「紫巖居士画像讀並序」がある。^②張浚についてはいま詳説を控える。『全宋文』では彼の文集の佚文蒐集に努め、巻四一二一以下に三五一篇が収められているが、この序文は含まれない。なお、普覺は大慧の諡号であるから、序文の題名は後人による附加となる。

(II) 尤焯撰「大慧普覺禪師語錄序」 淳祐十二年(一二五二)

大惠說法、縱橫踔厲、如孫吳之用兵、而廣闊弘深、不可涯涘、如大海水。魚龍飲者、莫不取足。今舉平昔聞見二則。朱文公少年不樂讀時文。因聽一尊宿說禪直指本心、遂悟昭昭靈靈一著。十八歲請舉。時從劉屏山。屏山意其必留心舉業。暨搜其篋。只大慧語錄一帙爾。次年登科。故公平生深知禪學骨髓、透脫關鍵。此上根利器、於此取足者也。焯早得於潘子善丈云爾。因取語錄讀之、至老不敢釋手。往在春陵、永嘉徐棘卿瑄亦貶是邦、未幾忽遷象臺。將行憂然涕泣。焯授以所携本。徐卿亟取讀之、達旦不寐。次日欣悅忘憂、與昨日復然二人也。遂携以去、手抄一本、乃見還。後三年、徐沒于貶所。臨終殆同游戲、不疾沐浴而逝。此書之靈驗如此、蓋焯之親觀也。徑山濬上人欲再刻版以廣其傳。因爲談此兩則、可勸願見樂施者。士流中、因此書悟發者多、不能徧舉也。淳祐壬子仲冬日、晉陵尤焯敬書

この序文は二冊本『語錄』の岩瀬文庫元版・内閣文庫江戸初期写本に附けられている。また中字蔵所収の十卷本『語錄』にも附けられているため、従来より知られている。ここでは岩瀬文庫元版に補写されたものを移録し、誤字は訂正しておく。このほか、『佛祖歷代通載』卷二〇(大正卷四九・六九二頁a)にも録されるが全文でない。『全宋文』巻七六八一にも「題大慧語錄」として収録されるが、『宗統編年』からの引用で完全でない。また、誤ってこれを統蔵所収の『大慧禪師禪宗雜毒海』の序文としている。尤焯(一二九〇―一二七二)は

木石と号し、嘉定元年（二二〇八）の進士。淳祐十二年五月には礼部侍郎、その十一月には権工部尚書に任ぜられてゐる。^{②⑥}（Ⅲ）の程公許跋文で彼を木石尤貳卿と称しているのは、礼部侍郎であつたためであろう。文中に朱熹（一一三〇—一二〇〇）と徐瑄（？—一二三八）^{②⑦}とが大慧の『語録』を指針としたという軼事が語られる。徐瑄については尤焯自身の見聞であるが、朱熹の話はその門人の潘時拳（字は子善）からの伝聞として記す。朱熹が進士及第した紹興十八年（一一四八）前後には、大慧は衡州に配流されていた。朱熹が所持していたという大慧の語録とは、あるいは道謙の編纂によるものかもしれないが、この話についてはなお検討を要するであろう。むしろ尤焯が大慧と朱熹を結びつけようとしていることが注目される。

（Ⅲ） 程公許跋

大慧禪師語録板、頃爲丙丁童所奪、寺僧德濬謀再繡梓以惠後學。公許嘗爲作二頌、俾持叩檀度。辛亥歲、蒙恩召還班列。濬復來謁、則知信施雲集、工役將竣。以木石尤貳卿序跋見示、退而伏讀、所舉二事最爲切當。大率先正宿儒、衛道植教、議論間不得不爲限防。然理之所在、本無二致。或者未嘗窺斑嘗鸞、膠於形迹、而輕加詆訾、余每病焉。後之覽是錄者、能先以木石之言而求之、思過半矣。是歲良月既望、滄州叟程公許書於武林寓舍。

この跋文は中国国家図書館南宋重刊本『年譜』と内閣文庫江戸初期写本『語録』のみに附けられている。ただし内閣文庫写本には誤写脱字等が見うけられる。中国国家図書館蔵『年譜』の活字版が、『宋人年譜叢刊』（四川大学出版社、二〇〇三年）その他に収録される。^{②⑧}また『全宋文』卷七三三九に「大慧禪師語録跋 淳祐十一年十月」と題して収められるが、日付には疑問がある。南宋重刊本の原文を確認できないため、ひとまずこれ

らの活字版に従っておく。程公許（一一八二—？）は『宋史』卷四一五に立伝される。嘉定四年（一二二二）の進士。時の宰相鄭清之を批判したために、湖州に四年蟄居していたが、権刑部尚書として朝廷に復帰した。それが辛亥歳すなわち淳祐十一年（一二五二）であったことが、この跋文から知られる。『大慧禪師語録』の版本はおそらく徑山寺に蔵されていたのであろうが、火災にあったため、同寺の德潛が重刊を発願し募縁したという重刊時の事情が伝えられている。德潛はまず尤焞に序文を依頼し、それを程公許に呈示して跋文撰述を乞うたらしい。（Ⅱ）の尤焞序文は淳祐十二年十一月に著されているため、この跋文はそれより以後の年の十月十六日（良月既望）でなくてはならないが、とすれば宝祐元年の撰述となる。程公許が賛意を述べている尤焞序文中の二事とは、さきの朱熹と徐瑄の軼事である。

（Ⅳ） 呂祖謙啓

祖謙 悚息上啓

大慧入般涅槃、法門山摧梁壞、四海道俗失所

師仰。自領

遺問、私心慘怛、迨今未已。竊惟

師資之重、其何以堪。此道墜地、任是責者、實

在 可庵。必將 勉爲衆生續佛慧命、

固不可專於獨善也。至禱至禱。

杖錫今尚留塔下、或徑爲歸福唐計、望

一報。益遠

道論。敢冀

以時珍重。不宣。 祖謙 悚息上啓

可庵 禪師 侍者

祖謙 有少香燭、託 賢公爲爇於

塔下。或賢公偶出、煩

可庵爲爇之也。

祖謙

祖謙 悚息みて啓を上る 大慧、般涅槃に入り、法門は山摧れ梁壞れ、四海の道俗は師仰するところを失いたり。遺問を領わりしより、私心慘怛し、今に迫るまで未だ已まず。竊かに惟えらく、師資の重きこと、其れ何んぞ以て堪えんや。此の道、地に墜ちんとす。是の責に任ずる者は、実とに可庵に在り。必ず將に勉めて衆生の為に仏の慧命を統ぎ、固より独善を専らにすべからざるなり。至禱至禱。杖錫、今ま尚お塔下に留むるや、或いは徑ちに福唐に帰るの計を為すや、一報を望む。益す道論より遠ざかりたり。敢えて冀わくば時を以て珍重せられんことを。不宣。

祖謙 悚息みて啓を上る

可庵禪師 侍者

祖謙に少か香燭ありて、賢公に託して為に塔下に爇かんとす。或いは賢公偶ま出ずれば、可庵を煩わして為めに之を爇かれんことを。祖謙

この呂祖謙啓は、中国国家図書館南宋重刊本『年譜』・立正大学五山版『年譜』・内閣文庫江戸初期写本『語録』に附けられている。『宋人年譜叢刊』などに収められる中国国家図書館蔵本の活字版は、この書啓のもののかたちを留めていない。ここでは南宋重刊本を忠実に模したと思われる五山版『年譜』の冒頭に附けられたも

のを移録しておく。ただし呂祖謙の筆跡についてはどの程度意図して写されたか不明とせねばならない。これは呂祖謙が、隆興元年（一一六三）八月の大慧の示寂にさいして、法嗣の可庵慧然に弔慰を述べた書簡である。大慧の示寂よりほどない頃であろう。可庵は福州雪峰山に住したとされるが、このとき徑山に滞在していたらしい。呂祖謙は可庵に福唐に帰る予定を尋ねている。あたかも隆興元年四月に呂祖謙は進士及第し、さらに博學宏詞科にも合格しており、臨安にあった。彼はこれよりさき十九歳のとき、父の赴任に従って福唐に赴いている。福唐は福州を言うであろう。呂祖謙はそのころ朱熹と出会っているが、あるいは可庵とも知り合ったものか。なお、文中の賢公は、大慧の示寂のとき近侍していた了賢（福巖了賢）のこと。呂祖謙は彼とも知りあいであつたらしく、自らに代わって大慧の塔への焼香を依頼したのである。

(V) 劉震孫書後 淳祐十二年（一二五二）

成公、學夫子者也。顧於／大慧尊尚若此、夫豈無所爲而然哉。方賊檜檀「擅」國、挾／「虜」要君、滅棄綱常、戕毒忠義。天下之士敢怒而不敢／言。大慧於此時、乃能犯不測之禍、陳義切責、瀕死靡／悔。風概凜凜、實紫巖・橫浦一輩人。此其有關於世道／甚大。宜公重惜其亡、而不能已也。豈惟成公、蓋文公／朱先生初年亦嘗訪之徑山。後有偈寄公云、徑山傳／語朱元晦、相忘已在形骸外。莫言多日不相逢、興來／常與精神會。嗚呼、是未易與俗人道也。承天老智朋／得／成公眞蹟、刻石置山中、爲書其後。淳祐十二年立秋／日、渤海劉震孫／

この書後は中国国家図書館南宋重刊本『年譜』・内閣文庫江戸初期写本『語録』のみに附けられている。ここでは内閣文庫写本から移録し、「虜」一字は『宋人年譜叢刊』などに収められる中国国家図書館蔵本の活字版

によって補った。劉震孫（一一九七？—一二六八）の字は長卿（もしくは長翁）、号は朔齋。魏了翁の婿であった。こののち三年後の宝祐三年（一二五五）に広東提挙常平に任ぜられ、礼部侍郎で終わっている。文中に、承天老智朋がさきの呂祖謙真筆の書啓を入手して、これを碑に刻んで建立したが、そのためにこの書後を著したと言う。智朋は介石と号し、大慧の法系に属す。当時、平江府（蘇州市）の承天能仁禅院の長老であつたらしい。石碑は同禅院に建立されたのであろう。さらに呂祖謙のみならず、朱熹も径山を訪ね、大慧が朱熹に偈を寄せたと言う。もし両者が径山で出会つたとすれば、大慧が最晩年に径山に再住した隆興元年までの五年間、朱熹が三十歳から三十四歳の間でなくてはならない。朱熹の年譜によれば、彼は隆興元年十月に臨安に上つているが、大慧はすでに八月に示寂している。両者の出会いは、おそらく当時行われていた伝説の類ではないかと思われる。

(VI) 楊棟書後 寶祐元年（一二五三）

頃余在山中、与客論儒釋事、不契。欲戲作□是公傳

以諷客。公以况道。公三子、曰光、以况往哲。曰芑、以况

今俗。曰梵、以况禪伯。公適廣。光即南往從之。梵亦欲

□公而北走、□行訪甚苦。芑、壞安者也。蓋生不知有

父、矧肯從。他日梵爲光所誚讓、芑亦隨讓之。或叱芑

曰、尔、梵之罪人也。彼与光雖路有正悖、而求父之志

□同、諄之惟各則可。尔、何爲者。且人子而不知父、則近

於禽獸。尔不以自誚而以誚人乎。凡世俗之誚禪學

者、無以異此。余意已具、命紙筆之累、婁百字、殊未快

暢。悶々中、開□卷得劉④元承手編伊川語。問、韓子讀

墨篇。程夫子曰、楊墨本學仁義、後人乃不學仁義。於

是投筆裂藁、嘆曰、盡之矣。言豈在多乎。夫子不可尚

矣。因喜甚。懷此語三年、欲得一知言者同其喜、未之

見也。溶上人以成公帖墨本來觀、遂書其後。寶祐癸

丑四月壬子眉山楊棟

①以下□は欠字。②この欠字は「從」字であろう。③「壞」字は「懷」字の誤り。④「累」字はおそらく

「類」字。⑤「婁」字はおそらく「數」字。⑥『河南程氏遺書』卷十八・伊川先生語五。⑦「墨本」二字は後
人の補写の可能性がある。

この書後は内閣文庫江戸初期写本『語録』のみに附けられている。ここでは同写本から移録し、注記した。文中には、この時重刊を發願した当人である徳濬が呂祖謙啓の拓本を彼に呈示したと記される。おそらく彼に跋文の撰述を求めたのであろう。したがって、どういうわけか中国国家図書館蔵の『年譜』には欠けているらしいが、この書後もとの南宋重刊本には附けられていたはずである。楊棟（生没年不詳）は、紹定二年（一二三九）の進士。景定年間から咸淳年間にかけて（一二二二～一二六七）執政となった。『宋史』卷四二二に立伝される。彼は、本伝にも「楊棟の学は諸これを周（敦頤）・程氏に本づき、海内の重望を負う」と記される篤実な儒者であった。当時の儒教側の仏教批判は、その彼も眉を擧めざるをえないほどであったことが察せられる。いっぽう禅者の智朋や徳濬は、大慧との関わりを示す呂祖謙の書啓を奇貨として、この書啓を士人のあいだに周知さ

せることにより、儒教側との協調をはかろうとしていたようである。

以上のうち、(Ⅰ)の張浚序文はひとまず措く。(Ⅱ)と(Ⅲ)は直接には『語録』にかぎって附けられた序跋である。また(Ⅳ)の呂祖謙啓の発現を承けて(Ⅴ)(Ⅵ)が撰述されている。これらを通して、大慧没後百年たらず、かつまた朱熹没後おおよそ五十年ばかりの南宋末期にあつて、儒者からの仏教や禅門への批判は相当激烈であり、いっぽう、禅者や禅ないし仏教に関心を持つ士人のなかには、それに抗して、大慧と朱熹や呂祖謙を性急に結びつけようとする動向もあつたことが窺われるのである。

註

- ① 張掄の伝記は詳しく知りえないが、瓊王趙仲備の女婿であり、しばしば金に遣わされている。淳熙年間には寧武軍承宣使などに任ぜられていた。『建炎以来繫年要録』卷一五四・卷一八七、『容齋隨筆三筆』卷十四、『貴耳集』卷下。また『宋人伝記資料索引』卷三、『全宋文』卷五四〇三(四川大学古籍整理研究所、二〇〇六年)の張掄関係の資料参照。なお、本稿で以下に引用する『全宋文』はこれに拠る。
- ② 『雲臥紀談』卷末附載『雲臥庵主書』(統藏二編・乙二二套・一冊二二頁c~二六頁a)。
- ③ 『年譜』卷末の宗演跋。遯庵宗演は『五燈会元』卷二〇に出る。
- ④ 明藏は実際には黄檗藏であるとされる。黄檗藏のもととなった明藏嘉興藏については、本稿では中華大藏経(北京版)漢文部分・第七七冊所収の『年譜』を参照した。
- ⑤ 以下については、石井修道氏『大慧語録の基礎的研究』(上)(下)(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三二号・三三三号、昭和四八年・五〇年)を参照。
- ⑥ 書目文献出版社、一九八七年。

- ⑦ 『中国著名蔵書家書目匯刊・近代卷』（商務印書館、二〇〇五年）所収。
- ⑧ 瞿啓甲編・民国十一年常熟瞿氏鉄琴銅劍樓書影印本。『珍稀古籍書影叢刊』（北京図書館出版社、二〇〇三年）所収。
- ⑨ 『鉄琴銅劍樓蔵書題跋集録』（上海古籍出版社、一九八五年）附録・瞿鳳起「先父瞿良士先生事略」（一九八二年）には清末期に鈔本百種を作成した事情が述べられている。『年譜』もこのうちに含まれていたはずである。
- ⑩ 出版者未詳。上海古籍出版社本（二〇〇〇年）四六五頁をも参照。なお、この記録は『鉄琴銅劍樓書影』に附けられた丁祖蔭の識語にも見えている。
- ⑪ 二冊本『語録』の書誌的な研究は、前注⑤石井修道氏「大慧語録の基礎的研究（上）」参照。
- ⑫ 前注石井氏論文参照。また『新修成篋堂文庫善本書目』（お茶の水図書館、一九九二年）四九八頁。成篋堂文庫の五山版を筆者は未見。
- ⑬ 卍字蔵（三一套四冊）所収『大慧普覚禪師語録』は二冊本の系譜に属すが、尤焯「大慧普覚禪師語録序」（三四八頁d）のみ附している。
- ⑭ 朱熹「少師保信軍節度使魏国公致仕贈太保張公行状」（晦庵先生朱文公文集）卷九五。
- ⑮ 『年譜』紹興八年の条、および『雲臥紀談』卷下（十八頁a～b）にも、時期は異なるが、道謙が張浚のもとに遣わされる途中で契悟した話を伝える。
- ⑯ 前注『雲臥紀談』卷下に「大慧先住徑山語要、乃（道）謙有衡陽編次」（十八頁c）とあるのを、大慧がさきに徑山に住持していたときの語要は、道謙が衡陽で編纂した、と解するならば、この語録を指しているであろう。
- ⑰ 余嘉錫『四庫提要弁証』卷九（中華書局、一九七四年版）。
- ⑱ なお、『文獻通考』卷二二七・経籍考五四も「大慧語録四卷」とし、『直齋書録解題』を引用。『宋史』卷二〇五・芸文志四には「僧宗杲語録 五卷 黄文昌撰」とするが、その内容は不明。
- ⑲ 現在通行の『宗門武庫』は『雪堂行拾遺録』一卷としばしば合刻されているが、『遺録』が、この『雪堂行拾遺録』であるかは不明である。
- ⑳ 徐元文については『清史稿』卷二五〇、『碑伝集』卷十二などを参照。また『清史稿』卷一四六・芸文志二に「百経堂書目四卷。徐元文撰」。

- ②1 統藏二編・二六套・五冊四七八頁b。
 ②2 前注⑤⑫参照。
 ②3 前注⑭参照。
 ②4 『大慧禪師禪宗雜毒海』卷下（統藏二編・二六套・一冊四五頁a、b）。
 ②5 前注⑬参照。
 ②6 『南宋館閣錄・統錄』統錄卷七（中華書局、一九九八年）二四九頁。
 ②7 徐瑄については、魏了翁「大理少卿贈集英殿修撰徐公墓誌銘」（『鶴山先生大全文集』卷八六）がある。
 ②8 『宋人年譜集目／宋篇宋人年譜選刊』（巴蜀書社、一九九五年）などを参照。
 ②9 『嘉泰普燈錄目録』卷中（統藏二編・乙一〇套・一冊一五頁c）、『統傳燈錄』卷三二・目録（大正卷五一・六八五頁c）。
 ③0 『東萊呂太史年譜』（『東萊呂太史文集』附録本）。
 ③1 福唐は福州福清県のことであるが、福州をも言う。たとえば『方輿勝覽』卷一〇の福州の郡名の項参照。
 ③2 『統傳燈錄』卷三二・目録（大正卷五一・六八五頁c）。
 ③3 劉震孫については『宋人伝記資料索引』卷五、『全宋文』卷七七八五の関連資料参照。
 ③4 智朋については『介石智朋禪師語録』一卷（統藏二編二六套二冊所収）が現存する。
 ③5 王懋竑『朱子年譜』卷一上。
- （附記）本稿は、首屆河北「趙州禪・臨濟禪・生活禪」學術論壇（中国・石家莊市、二〇一一年五月）において、「中国
 国家図書館蔵《大慧普覚禪師年譜》初探」と題して発表した原稿にもとづいている。